



アイリスの剣 3

小田マキ

Maki Oda

RB

レジーナ文庫



◀ リューノ

ブルーデンスの両親

ヒラルダ ▲

漆黒アイリスの宮廷医。
国内唯一の一級魔術師
でもある。

▲ ティルディア

雷龍隊のメンバー

▲ サルーク

▲ チェイス

▲ ライサチェック

フォーサイス ▶

雷龍隊隊長。ブルーデ
ンスの婚約者。彼女の正体
を知ってようやく打ち解け、
溺愛体質に。

登場人物
紹介

▲ ブルース

雷龍隊の元副隊長。
ブルーデンスの男装し
ていた時の姿。

ブルーデンス ▲

性別を偽り、「ブルース」として雷
龍隊副隊長を務めてきた。両親
の命令で、素性を隠してフォーサ
イスのもとへ嫁ぐことに。

目次

アイリスの剣3

7

書き下ろし番外編
刺激的な贈り物

367

アイリスの剣 3

プロローグ

「貴方……リユーノ。彼の蝶が、トゥリース邸へと飛んだようですわ」

機械的な女の声が、闇の中を滑るように横切った。

「たかだか手負いの一匹に、一体何ができる？ テイルディア」

彼女の呼びかけに、片足を引きずるような不自由な足音とともに、初老の男の声が答える。

石壁の窪みに置かれた小皿に小さな炎が揺れていたが、あまりにささやかで声の主達の姿を明らかにしなかった。一旦二人の声が途絶えると、辺りは静けさと闇に包まれる。それでも根気よく耳を澄ますと、完全に闇に落ちた部屋の奥から、ほんのわずかに金属音のようなものが聞こえた。

「たかだか手負いの一匹……そうかもしれません。けれど、一匹のうちに駆除しておく

べきですわ。ヒラルダは此度のことに気付いています。いずれ貴方が描いた予定調和を乱すでしょう」

再び周囲に響いた夫人の声に、夫であるリユーノを諫める節はなかった。ただ、その声が合図となったように、闇の中には一対の赤い光が現れる。

「あの小石のように、か」

寄り添うような衣擦れの後、不自由な足音は止み、辺りに忍び笑いが響いた。

「あれは違いますわ。すべて淀みなく運んだはずです。貴方にとってユージンの謀反は、想定通りだったのでしょうか？ 初めから助からないとわかっていた命を、最大限利用して……壊した」

テイルディアの言葉が終わると同時に、辺りには一層大きな金属音が響いた。

淀んだ空気をビリビリと震わせた荒々しい音は、渾身の力でもって、戒めの鎖を断ち切ろうとしているかのようなのだ。それに呼応して、静かな水面に波紋がじわじわと広がるように、あちこちで一対の赤い光が瞬いた。

そんな状況を前に、リユーノの声はさらに冷えていく。

「あれはまだ落ち着かんのか、予想よりもしぶといな」

「私怨がそれだけ深いでしょう。もう少し強い石が必要ですよ。今のままでは、解き

放った途端に暴走してしまいます……そのためにも、あの薄汚い蝶の駆除を急ぐべきではなくて？」

ティルデアがさらに言葉を重ねると、傍らで爛々と輝いていた一对の赤が、瞬時に輝きを失った。

「そこまで言うならば、ヒラルダの処置はお前に任せるとしよう」

わずかに逡巡するような間を置いて、リユーノは了承の意を返す。

すると、再び部屋の中には不規則な足音が響き始めた。

「あれを落ち着かせることが、最優先だ。他の者までその憎悪につられる」

「では、ただちに……もう猶予はありませんもの」

言葉を交わす二人の声音に、逼迫した雰囲気はなかった。どこまでも、想定内の事態だということのように。

壁面の小さな光源が届かない深い闇の向こうからは、依然として甲高い金属音と、荒々しい呼気が続いていた。

第一章 喪装の魔術師

1

その日、ダグリード侯爵邸では、使用人達がいつも増して、きびきびと働いていた。朝方から降り出した雨のために室内は幾分か薄暗かったが、皆の表情は明るい。その理由の一つは、しばらく不在だった当主がようやく戻ってきたからだ。

そして、もう一つは……

「おはようございます」

朝食の席に現れた彼を迎える麗しき婚約者、ブルーデンスの存在だった。

広間に足を踏み入れるフォーサイスに、彼女はぎこちないなりに笑顔を見せ、恭しく頭を垂れる。今までのように他人行儀なそれと比べて、格段な進歩だった。

ところが、フォーサイスはブルーデンスの姿を一目見るなり、眉根を寄せる。

「……何だ、その格好は？」

不機嫌そうに吐き出された言葉に、彼女も困ったように眉を下げた。

「まあっ、ブルーデンスお義姉様！ とてもよくお似合いですわ」

続いて現れたファティマは歓声を上げ、素早く義姉に寄り添う。

「ファティマ、またお前の悪ふざけかっ……」

フォーサイスはブルーデンスのもう片側に立ち、反対側にいる妹を詰問する。

「まあ、悪ふざけだなんて！ お義姉様のお気持ちも、汲んでのことですわ」

大の男さえ裸足で逃げ出しそうな鋭い視線を受けても、ファティマは一切怯むことなく兄に言い返した。

容姿こそ非の打ち所のない兄妹だったが、ブルーデンスを挟んで睨み合う様子は、戦利品の所有権で揉める盗賊さながら……上品さなど、欠けらもない。

「待ってください、お二人とも！ やはり食事の席では無作法な装いですし、私の思慮が足らなかったのです。直接許しを請わずにフォーサイス様の服をお借りしたことも、申し訳ありませんでした」

「俺の服？」

戦利品……否、ブルーデンスの言葉に、フォーサイスは生意気な妹から彼女に視線を移す。

言われてまじまじと見れば、彼女が身につけていたのは確かに十代の頃、一度だけ袖を通した正装だった。光沢のある黒い生地の上下は、ボタンの代わりに革紐で編み留められている。

そのことに気付いた途端、フォーサイスの心に一気に少年期の苦い思い出が押し寄せてきた。

「貴方がもう着られなくなった服なのだから、別にいいでしょう」

「……っ、母上」

瞠目して固まった背中に、エルロージュの声が投げかけられる。振り返った先から見返す優しげな笑顔が、したり顔に見えてならない。

「事後報告になってしまい、申し訳ありません。フカッシャーの屋敷から持ってきた衣装には、黒い服が一着もなかったので、皆様にご相談したのです」

事情を口にしたブルーデンスに、フォーサイスは彼女に向き直る。愛しの婚約者を見つめることは喜びであるはずなのに、相反する苦い思いが彼の胸を衝いた。

決して、服が似合っていないわけではない。光沢のある上品な黒衣は彼女の白い肌に映え、上下の分かれた意匠で強調された柳腰も、思わず抱き寄せたくなるような魅力がある。

ブルーデンスは女性としては長身だったが、十四年前のフォーサイスよりも若干低い。筋肉の厚みもまるで違うはずなのに、彼女は服をだぶつかせることなく着こなしていた。恐らく昨夜のうちに、使用人が幅や丈を詰め直したのだろう。

その黒衣は、アイリスとオルガイムの国交復活を記念して、サスキアから贈られたものだ。両国の友好を際立たせるために、来訪の日には自分はこの服を纏って彼女を出迎えた。そして、初対面の救世主に対し、無謀にも剣の勝負を挑んで、呆気なく敗れた。否応なく若き日の醜態^{しやうたい}を突きつけてくる因縁の品であるため、当時の記憶とともに固く仕舞い込んでいたのだ。

「何か問題があるかしら？ フォーサイス」

かつての苦い思い出を纏ったブルーデンスを前にして固まる自らの耳を、母の柔らかな声が刺す。従者が引いた椅子に座りながら、にっこりと微笑みかけてくる母の目は、笑っていないかった。

常日頃物腰柔らかな人ほど、怒ると恐ろしい。

当時、強引に敢行したサスキアとの打ち合いで、地べたに叩きつけられた己の姿に、エルロージュは卒倒した。これは制止の声に耳を貸さなかった自分に対する、母の十年越しの意趣返しに違いない。

「本当に申し訳ありません。一般的にオルガイムでは、髪結いの型で喪を表すのですが、私にはアイリスの血も流れていますから、黒い喪装も身につけたかったです」

苦々^{うなだ}しげな表情を刻んだ彼に、ブルーデンスは再度謝罪を口にする。

項垂^{うなだ}れる彼女は、騎士団時代と同じ三つ編みに髪を縛っていた。見事な銀髪を縛っているのは組み紐で、舞踏会の夜と同じ、蝶を模した飾り結びが施^ほされている。想いを自覚する前からヒラルダを連想して不快だったが、忌^{いみ}を意味していたとは思わなかった。

「いや、構わない。服の意匠^{いしょう}から気付いたかもしれないが、それはオルガイム製でサスキアから贈られたものだ。彼女を敬愛するお前の方が相応^{あきさわ}しいだろう」

不安げに瞳を揺らすブルーデンスに、フォーサイスはようやく言葉を返した。その言葉には、目の前の彼女だけでなく、母と妹まで目を剥いた。怒り狂って騒ぎ立てると思っていたなら、生憎^{あいにく}なことだ。

誤解が解け、皆に受け入れられたブルーデンスが、生きると誓ってくれたときに決めたのだ。少しでも彼女の中から惨劇の記憶が薄れるなら、自分は何でもする。変わろうとしているブルーデンスに対し、自分が過去を引きずっているわけにはいかない。かつての慢心を見せつけられる決まりの悪さなど、彼女の受けた苦しみ比べれない。

ば取るに足らないものだ。

ブルーデンスの異母兄ストレイスと、フォーサイスの従妹ゴーシャ……二人の死を悼んで、ダグリード邸でも皆喪章をつけ、邸門には弔旗を掲げている。

誰よりも彼らの死を嘆き、責任を感じているのはブルーデンスだろう。彼女は優し過ぎるのだ。

二人を手にかけたのはブルーデンスだが、ストレイス自身が彼女に討たれることを望み、ゴーシャに至っては自業自得だった。身勝手な復讐心に駆られず、少しでも己の所業を悔いる心があれば、こんな結末は訪れなかったはずだ。

もちろん叔父メイスには申し訳なく思うし、死んだ後までザイロンに利用されたのは哀れだとは思う。

けれど、冥界に堕ちた後、魔物と化したゴーシャにとどめを刺したことを、フォーサイスは後悔していなかった。だからこそ、ブルーデンスにも早く過度な自責の念から解放されてほしい。

フォーサイスは、改めて彼女の全身に視線を向ける。

「確かに、よく似合っているな」

本来のブルーデンスは非の打ち所のない淑女で、男装は強いられただけだったが、慣

れとは恐ろしいものだ。その面差しは有能な副官時代に立ち戻っている。

フォーサイスは自ら挑んだサスキアとの試合に敗れた後、屈辱を糧にそれまで以上に鍛錬を重ねた。身体を鍛え直し、当時から低くはなかった身長もさらに伸びた。

悔しいが、鬼神と呼ばれる今の自分があるのは、オルガイム王妃とこの服のお陰だ。

忘れ去るのでは駄目だ、乗り越えなければ……苦い思い出と向き合うことを決めたフォーサイスは、愛しい彼女に向けて、ようやく微笑むことができた。

「ありがとうございます、フォーサイス様。大切に着させて頂きますね」

微笑み返してきたブルーデンスは、大事そうに袖を撫でる。

彼女を喜ばせたのが、自分の言葉なのか、サスキアの衣装なのかはわからない。

それでも、一度は自分の肌に触れた着衣が彼女の身体を包んでいることは、決して悪い気分ではない。

「……もうっ、スーブが冷めてしまいますわ」

吹っ切れた気分でブルーデンスと見つめ合っていると、ファティマが焦れたような声を上げた。きつとフォーサイスが、想像していたよりもあつさり引き下がったことが気に入らなかつたのだろう。

甘く見てもらつては困る。ブルーデンスに対しての愛情は、着衣によって揺らぐよう

な付け焼刃ではない。片方の口角を上げながら一瞥すると、ファティマは悔しそうに頬を染めた。

「ファティマ、はしたないわよ。貴方達、いい加減席に着きなさい」

エルロージュはベティコートの手をギュッと握り締める娘を窘めつつ、小さなため息を漏らす。

それを機に、ギスギスしていた空気がゆっくりと氷解する。戸口で事態を見守っていた執事のスディンも、何事もなかったかのように最初の皿を運び込んだ。

「……貴方が成長してくれて、よかったこと」

上座の自分の席へと向かう途中、母の後ろを通ると、フォーサイスにしか聞こえない声で囁かれる。

ファティマと結託した意趣返しかと思いきや、母の愛は偉大だった。

* * *

朝食が終わって一刻ほど過ぎた頃、ダグリード邸に一人の訪問者が訪れる。弔旗を掲げた正門を避けた彼は、作法通りに裏門の扉を叩いた。

「これはっ……申し訳ございません。大変な無礼を申しました、お許しください」

応対したスディンは、一瞬表情を崩した後自らの非礼を詫びる。主だった上流階級の顔と名前を記憶する敏腕執事さえも、即座に思い至らなかつたその客人は、ただちに応接室に通された。

スディンから来訪を伝えられ、急いで駆けつけたブルーデンスとフォーサイスは、部屋の扉を開けた瞬間に固まる。

「あのっ……申し訳ありません。驚いてしまって」

我に返ったブルーデンスは、それだけ言うのがやっとだった。

「……朝から雨が鬱陶しかったのは、お前のせいかな？」

フォーサイスが零した不躰な台詞を窘めることも、雨の中訪れた客人の足労をねぎらうことも忘れ、ただ彼の完璧な弔問姿に釘付けになる。

濡羽色の来訪者は、長椅子に静かに腰を下ろしていた。

朝から生憎の雨だったが、彼の喪装はまったく濡れていない。外衣の袖は末広がり、肩から手首にかけてザツクリ切り込みが入り、詰め襟のシャツが覗いていた。外衣を留める革ベルトにストラックスや靴に至るまで、黒一色で統一されている。

闇を切り取ったような漆黒の喪装は、死者を悼むというよりも、「死」そのもののよ

うに見える。

「フカッシャー公爵夫妻が監視してるかもしれないのに、いつもの格好で来るわけじゃない。アタシがアンタ達を助けたのが、一気にバレちゃうわよ……っかし、ブルーデンスちゃんも相変わらずだわねえ。まあ、狼と一つ屋根の下で暮らすなら、そのくらいで丁度いいわ」

豪華な革張りの長椅子に身を沈め、一息で長台詞を吐いたのは、彼の宮廷医だった。

ただし、口調こそ普段通りだったが、そこにいる彼は一級魔術師、ヒダルゴ・プロウル本来の姿に戻っている。けばけばしい化粧と極彩色の衣装を取り払うと、中性的に整った容貌が一層際立って見えた。

「早くいらっしやいな、アタシだって暇じゃないのよ。アンタ達の診察が済んだら、メイスのところにも行かなきゃならないんだから」

「それは、やはり俺の問題でっ……」

「私も参ります！」

自分を庇って前に出たフォーサイスの腕を、ブルーデンスは掴んで引き留める。

そして、続く台詞を、決意の言葉で遮った。

「アンタ達は昨日まで死にかけてたのよ、まだ大人しくしてなさい。今のアンタ達では、

メイスに会っても無駄に手の内を晒すだけよ。テイルディアが彼に何を吹き込んだかわからないし、ゴーシヤちゃんの遺体をただ返したとも思えないんだから」

けれど、二人の言葉を聞いたヒラルダは首を横に振る。

「動揺した人間を相手にするときは、いつも以上に冷静にならなきゃならないわ。お兄様を亡くしたブルーデンスちゃんと同じように、娘を亡くしたメイスも我を忘れてるはずよ。ちよつとでも弱みを見せれば、真実なんて簡単にねじ曲がってしまうわ。散々ひどい目に遭ってきたんだから、ちよつとは学習しなさい」

さらに続けられた言葉に、ブルーデンスは何も言い返せなかった。

サクリファを埋め込まれ、化け物と化したストレイスの姿が脳裏に浮かぶ。

病床の長子に対しても容赦ない父母が、遺体となったゴーシヤに憐れみをかけるとは到底思えなかった。魂は冥界の業火で焼失し、唯一残された遺体まで汚されたかと思うと、胸の奥から強い自責の念が湧き上る。

兄と彼女の命を奪った剣の感触がまざまざと蘇り、手を強く握り込むが……
「ブルーデンス、お前のせいではない」

そんな言葉とともに、ブルーデンスの手はフォーサイスの手で強く握り込まれていた。いまだ己の手は、彼の腕に縋ったままだったのだ。罪悪感に塗れた恐怖を逃がすように、

ブルーデンスはゆつくりと息を吐き出す。

「それに、アンタ達の手足になって動いてる雷龍隊らいりゅうたいの坊や達や、今まで心配かけ通したダグリード邸の人達の気持ちも考えなさい。恩知らずな半病人がまずやることは、たっぷり休んで元気になることよ」

手厳しい言葉は続き、それにはブルーデンスだけでなく、フォーサイスもぐうの音も出なかった。正論だからこそ、ヒラルダの言葉は耳が痛い。

「はいっ、説教はここまで！ さー診察始めるわよ。ちよつと腹立ったから、手荒になつても勘弁してねー！」

大きく手を叩いた彼は、妙に迫力のある笑みを浮かべて長椅子から立ち上がり、漆黒しつこくの外衣を脱ぎ捨てた。

2

「痛かつたら言つてねえ、止めないけど」

「誰が言うか！ ……っ、……今のわざとだろー！」

「ンなワケないでしょ、今はとっても繊細な作業してるの。ちよつとでも手元が狂つたらアンタ、あつと言う間に、冥界へ逆戻りよー」

「貴様なんぞに、背中を見せたのが間違いだつたっ……！」

「自分の命を握つてる相手を挑発するなんて、いい度胸ねえ……内臓一個取り出してやるわよ」

「ぐあっ……！」

「ごっめーん。間違えて、胃袋わしづか鷲掴んじやつた……キャハハハッ！」

怒声と甲高い笑い声が、ダグリード邸の客室に響き渡った。

狂気の光景を前にして、ブルーデンスは椅子に腰かけたまま固まる。そして、深く後悔くわいごうしていた……せめて、自分が先に診察を受ければよかったと。

ヒラルダから診察を受けるため、三人は寝台のある客間へと移動していた。

今目の前の寝台では、俯うつぶせになったフォーサイスの背中へと、ヒラルダが覆い被さるようにして左手を突き立てている。シャツを着たまの背中に、彼の手は肘まで深々と沈んでいた。

何度も自分達を助けてくれたヒラルダ……その医師としての腕を信用していないわけ

ではない。これはれっきとした医療行為であると、頭ではちゃんと理解している。けれど、フォーサイスの背中に突き入れた腕を、掻き回すように動かすヒラルダの笑顔が、あまりに怖いのだ。

フォーサイスは騎士という職業柄、物理的な痛みには人一倍耐性がある。ブルーデンスから彼の表情は見えなかったが、声には明らかに苦痛が滲_{にじ}んでおり、その手もシーツをきつく握り締めていた。

まさかとは思うが、先ほど分別のないことを言った自分達への仕置きなのではないだろうか？

フォーサイスの身はもちろん心配だったが、次は我が身……ブルーデンスは心底怖_おじ気づいていた。できることなら、今のうちに失神してしまいたい。

「……やっぱりまだいたわねっ、捕まえた！」

必死の神頼みをしていたところ、ヒラルダが一際高い声を上げ、左腕を高々と突き上げる。その手には、黒くて細長い紐のようなものが握られていた。ヒラルダに尻尾を掴まれ、まるで蛇のようにウネウネと蠢_{うご}いている。

「それはっ……?」

「猫ちゃんの呪いの残りカスよ。大丈夫、宿主から引きずり出しちゃえば、もう何もで

きないわ……ほら、消えちゃった」

呪いの残滓_{ざん}だという物体は、ヒラルダの言葉通り、見る間に黒煙を上げて消えてしまった。

「猫、……呪いって……」

ヒラルダの言葉に、昨日彼の屋敷で見た二人のやり取りを思い出す。

冥界の門を潜_{くぐ}ったために、呪いが解けたとかどうとか……問_た質_たしている途中にファティマの乱入を受けて、有耶無耶になっていた。

寝台のフォーサイスに視線を移すと、彼は上体を起こしながら己の左腕を確認している。シャツの袖を捲った腕からは、自らを庇_{かば}って噛みつかれたツイルの歯形が、綺麗さっぱり消えていた。

「これで完全に解けたわ。死後硬直の違和感も、一週間もすればとれるでしょう」

「……胃がムカムカするが、一応礼は言っておく」

荒っぽい治療に、フォーサイスは不快そうな表情で謝意を告げる。

ただし、二人の間で話が完結しても、ブルーデンスには納得いかなかった。

「フォーサイス様っ……」

彼から詳細を聞き出そうと、ブルーデンスは寝台脇の椅子から立ち上がる。

「気にするな。これで帳消しだ、ブルーデンス」

「……えっ?」

シャツの袖を戻しながらフォーサイスが投げかけてきた言葉に、ブルーデンスは戸惑う。何を示しての言葉なのか、すぐにはわからなかった。

「舞踏会の夜の不手際は、これで帳消しだ。それでいいだろう?」

「あのっ、それは……」

無傷になった手をブルーデンスの頬に添わせ、今度は至近距離で囁いてきた彼に、疑問の言葉が途切れる。

煙に巻こうとする彼の魂胆はわかっていても、こんな風に接近されればたちまち鼓動が跳ね、思考力が薄らいでしまう。ずっとフォーサイスに恋い焦がれてきたブルーデンスにとつて、彼の微笑みは憎らしいほどの威力を持っていた。

「盛ってんじゃねえぞ、ガキがっ!」

しかし、二人の世界は、極彩色改め喪装の魔術師によって、瞬く間に一刀両断された。「なっ……?」

フォーサイスは短い驚愕の声を漏らし、ブルーデンスの跳ね上がった鼓動は止まりそうになる。フォーサイスの左胸からはニョキニョキと腕が生え、自らの頬にかけられた

彼の手を掴んでいたのだ。

それは、フォーサイスの背後に立つヒラルダの左腕だった。

「デメエ、いい気になってやがるとなあ……今度こそ内臓、握り潰すぞ」

フォーサイスの手を引き剥がしながら、本性を剥き出しにした彼は、洒落にならない脅し文句を吐く。

「やめてっ、ヒラルダ……!」

そこに至つてようやく我に返ったブルーデンスは、悲鳴に近い声で叫んでヒラルダの手に縋るが……

「……キャハハハハっ、冗談よ! 冗談っ!」

次の瞬間、弾かれたようなけたたましい笑い声を上げた彼は、フォーサイスの中から腕を引き抜いた。

「フォーサイス様っ?」

「貴様っ……気色の悪い真似をするな!」

一瞬前まで彼の腕が生えていた己の胸元を押さえながら、フォーサイスは地を這うよ

うな怒声を上げる。けれど、余程気味が悪かったようで、その声には覇気がなく、ブルーデンスが重ねた手もわずかに震えていた。

「命の恩人の前で無駄にイチヤイチヤするからよ。この程度で帳消しだなんて図々しいったら……はいっ、いつまでも調子に乗ってないで、終わったらさっさと退く！ 次は、ブルーデンスちゃんよ」

「……はいっ？」

ヒラルダの言葉に、先ほどとは別の理由で、ブルーデンスの心臓が跳ねる。

こんなものを見せられて、怖がらずにいることなんて無理だ。フォーサイス同様に痛みには耐性があるが、こんな奇々怪々な力に対抗する術はまったく思いつかない。

「骨折した翼の治癒具合を診たいの。飛べなくなると困るでしょ」

しかし、ヒラルダの指摘に、ブルーデンスはようやく思い出す。

フカッシャー公爵邸別館で母と死闘を繰り広げた際の翼の負傷……薄れゆく意識の中、床に叩きつけられた背中からは、骨が砕けるような鈍い音が聞こえた。

「……ブルーデンス」

思い出して小さく身震いすると、重ねたままだった手をフォーサイスが握り込んでく。惨劇の影を追い払ってくれた温かい手を握り返し、ブルーデンスは微笑んだ。



「……お願いします」

そして、心を決めたブルーデンスは、ヒラルダを見上げてそう口にした。

「はいっ、交代！ さあつ、アンタは降りた、降りた！ ブルーデンスちゃん、そのままでいいから横になっ……て、アラ？」

部屋履きを脱ごうと前屈みになった彼女の背に向かって、ヒラルダが不審げな声を上げる。

「……あの、どうかされましたか？」

「その上着、スリット入ってないの？ オルガイム製でしょ？」

「スリット？ それは俺が十八のときに、サスキアから贈られたものだが……」

問いかけに答えたのはフォーサイスだった。

「ああ、それで。飾り紐で上着の前を留めてたから、てっきりブルーデンスちゃんのだと思ったのよ。よく考えたらそんなはずなかったわね。フカツシャー公爵夫妻が、わざわざ疑われるようなもの持たせるワケないもの」

得心がいったというようにヒラルダは頷いたが、ブルーデンスはその言葉が引っかかり、小さく眉をひそめる。

「どうかして、ブルーデンスちゃん？」

「いえ、何でも。全部、脱いだ方がいいで……すか？」

語尾が途切れかけたのは、傍らの椅子に腰かけたフォーサイスが、尋常ではない威圧感を発したからだ。

そちらを見遣ると、なぜか彼は鬼のような形相で、ヒラルダを睨み上げていた。二人の間に、一触即発の空気が漂う。

「……あー、別にいいわよ。上着だけ脱いでくれたら」

ただ、それもヒラルダが吐いたため息交じりの言葉に、程なくして四散した。

「……はい」

言外の攻防戦にブルーデンスは小首を傾げるが、不穏な空気が消え去ったことにホッとして上着を脱ぐ。皺にならないように椅子の背にかけると、ブルーデンスは寝台の上で俯せになった。

「しばらく動かないでねえ」

後頭部からヒラルダの声がした後、彼の指先が肩に触れる。

指先は肩甲骨をなぞるように降下し、文字を描くように蠢いた。むず痒いような、何とも言えない感触にシャツの下の肌が粟立つが、シートを握り込んでやり過ごす。

あまりにもまだるっこしい。こんなことなら一思いに突き立てられた方がましだ……

ブルーデンスがそんな風に思い始めたところで、ようやく指の動きが止まった。背中の中心に掌てのひらを押しつけるようにされると、ドンツと全身に衝撃が走る。その衝撃は身体の末端まで行き渡り、目の奥にチカチカと閃光が走る。

次いで、四肢の先端から押し戻すような波動が起り、寝台の上で身体が跳ねる。

「ブルーデンスっ……？」

傍かたわらから、フォーサイスの狼狽ろうばいした声と、椅子が倒れるようなガタンという大きな音がした。明滅する視界の片隅に、シーツの上についた彼の手が映り込む。

「大丈夫だから、黙って見てなさい！」

背中に添えた手で跳ねるブルーデンスの身体を押し返しながら、ヒラルダが早口で注意する。

押さえつける手を通し、背中から内臓が引つ張られるような強い吸引力を感じて、ブルーデンスは思わず目の前の手を握った。加減のない握力にもかかわらず、フォーサイスは手を決して振り解こうとせず、逆に強く握り返してくれる。

そのことに、ほんのわずかな安堵を覚えた。

「……ブルーデンスちゃん、抵抗しないで力を抜きなさいっ」

少し息が上がったヒラルダの声が、再び耳を衝く。

けれど、そんなことを言われても、どうすればいいのかわからなかった。強く握り過ぎた手の甲には筋が浮き、プルプルと震えている。

「ブルーデンス、大丈夫だ」

そんなとき、フォーサイスが気遣う台詞せりふとともに、手の甲を優しく撫でてくれた。

その温かな感覚に、自然と力が抜ける。身体の中を暴れ回っていた脈打つ波動も、徐々に治まっていった。

「はい、もう大丈夫よ……どう？ 感覚ある？」

「えっ……？」

ヒラルダの問いかけと同時に、ある部位を撫で上げられる感触を覚え、ブルーデンスは声を上げる。肩甲骨の付け根から、大きく広げるように彼が手を滑らせているのは、紛れもなくブルーデンスの身体の一部だ。

「翼……」

確認できない自分に代わり、フォーサイスが声を上げる。

そのことを実感した途端、ブルーデンスの翼の隅々に感覚が戻っていく。ヒラルダが今触れているのは、先端の風切り羽だ。

「じっとしてね、今大事なところだから」

脊髄反射のように羽ばたきかけたところ、ヒラルダに注意を受ける。

「……済みません」

謝罪しながら、正常な思考が戻ったブルーデンスは、様々な違和感に囚われる。

誰かの手で無理矢理に翼を広げさせられたのは、初めての経験だった。

思い返してみれば、あの惨劇で母に首を絞め上げられたとき、自分は翼を広げたまま意識を失ったのだ。

そのときも、ヒラルダが身体の中に戻してくれたのだろうか？

オルガウム人が翼を出し入れするのは、本能的なものだ。仕組みなど、自分でもわからない。

彼はどうしてここまでオルガウム人について詳しいのだろうか？

身体のみ構造だけでなく、文化についても。オルガウム人の服の背中には、翼を出し入れするためのスリットが入っている。ただそれは、人目に触れないように生地も二層になっていて、一見してわかるものではなかった。

ヒラルダの知識や発する言葉は、いつも正しい。

けれど、自らのことを一切語らない彼が自分に近づいてきた本当の目的を、ブルーデンスはまだ知らない。自分のことを好きだと公言するヒラルダだが、それは恋情ではな

いと思う。ただ幸せになってほしいと、惜しみなく優しさだけを与えてくれる。

どうして、自分に優しくしてくれるのか。自らの命を削ってまで、助けてくれるのか……理由を尋ねたいのに、なぜかヒラルダの顔を見ると、躊躇してしまふ。

そもそも自分も、彼のことをどう思っているのだろうか？

「はい、おしまい。多分、これで大丈夫でしょう」

ヒラルダの声と、何かの金具を留めるようなバチバチという音が聞こえ、ブルーデンスは我に返る。いつの間にか肩甲骨と翼の付け根には、締め付けられたような感覚があり、うまく動かせなくなっていた。

「ああ、無理して動かさないで。石膏で固めてるから」

「石膏？」

ブルーデンスは、ヒラルダの言葉を復唱する。

「そう、骨折してるのよ。このまま仕舞っとくから、絶対に翼を広げようとしちゃ駄目よ」ブルーデンスは身構えたが、先ほどのような衝撃は訪れなかった。土に水が染み込んでいくような感覚の後、肌を撫でるヒラルダの指先の感触が背中に戻る。

「もう起きていいわよ」

その言葉に従って起きようとしたところで、ようやくブルーデンスはフォーサイスの

手を握ったままだったことに気付いた。咄嗟に手を引こうとしたが、逆に引つ張られ、体勢を崩した上体が彼の腕の中に抱き込まれてしまう。

「……大丈夫か？」

耳元で囁かれた言葉に、ただでさえ働きの鈍っていた脳が沸騰した。

「だっ、大丈夫ですから、放してください！」

羞恥心からブルーデンスは訴えるが、彼はなかなか解放してくれない。焦ってフォーサイス突き飛ばし、彼女は背後に立った喪装の魔術師を仰ぎ見るが、彼は自分達を見てはいなかった。

大きく肩で息をしながら、左手で顔を覆っている。その手の甲から発される紫色の光は、不規則な呼吸に呼応するように点滅し、表情こそわからなかったが、ひどく辛そうだ。

「……ヒラルダ？」

フォーサイスも縫い止められたような彼女の視線の先を追ひ、不審げに呼びかけた。

「……っ、……イチイチ止めるのが、アホらしくなってきたわ」

二人の視線を浴びながらヒラルダはゆっくりと手を下ろし、言葉を発した。

呆れ返ったような声音に、息を切らしている様子はない。苦笑を浮かべた顔に、疲労の影は見られなかった。

「貴方は大丈夫なのですか？ ……ヒラルダ」

先ほどの姿が打ち消せず、ブルーデンスは真摯に問いかける。

「貴女は人の心配する前に、自分の心配をしなさい。診察は終わりよ、もう帰るわ。アタシが暇じゃないのは、知ってるでしょ？」

はぐらかすように言ったヒラルダは、後ろの椅子にかけていた漆黒の外衣を羽織る。

「見送りはいらないわ。どこで誰に見られるかもわからないでしょ。それに、身体の中をアチコチ弄ってるから、無理は禁物よ……最後に、ブルーデンスちゃん」

「はい？」

矢継ぎ早に言った後、一旦言葉を切ったヒラルダに、彼女は居住まいを正した。

「貴女の翼は付け根の骨にひびが入っていて、風切り羽も折れてる。細胞活性剤を練り込んだ石膏で固めた上に装具で固定しているから、何があっても絶対に翼を広げたりしないように。そう簡単には、外れないような作りになってるけど……約束して。無理に広げれば、貴女は二度と飛べなくなるわ」

真顔で投げかけられた言葉が、胸にズシリと響く。翼を失うということは、ブルーデンスにとって手足をものがれることと同義なのだ。

「わかりました」

「よろしい！ じゃ、帰るわ」

満足げに頷き、ヒラルダは扉へと身を翻した。

「待て、ヒラルダ」

ずっと黙っていたフォーサイスが呼び止める。

「……何よ」

「動揺した人間を相手にするときは、いつも以上に冷静であらねばならない……お前の台詞だ。今のお前は、どう考えても本調子とは思えん。今さら行くなどと言わんが、今日はやめておけ」

彼の顔も真剣だ。建前や対抗心ではなく、芯からヒラルダの身を案じているようだった。「誰に向かって言ってるの、アンタ。アタシのことは、アタシが一番よくわかってるわよ……近いうちにまた来るわ、吉報を待ってなさい」

フォーサイスをまっすぐに見返したヒラルダは、悠然と微笑んで言い、今度こそ扉から出ていった。

「大丈夫でしょうか？」

「どうだろうな……ただ、止めても聞く奴じゃない。信じて待つしかないだろう」

閉ざされた扉を見つめて呟いたブルーデンスに彼が答えた言葉は、何の慰めにもなら

なかった。

3

「お帰りでございますか、ヒダルゴ様」

背中にかけられた声に、喪装の魔術師は振り返る。

禁句の名を呼ぶのは、一体誰なのか……不機嫌な表情を浮かべる彼は、石畳の歩道の上に、ダグリード侯爵家の紋章を掲げた馬車と、一人の老人を見つけた。

左目にモノクルを嵌め、かつちりと燕尾服を着込んだ彼には見覚えがある。

「……あら、貴方は確か、ヘザース邸の執事さんだったわね」

数日前、フォーサイスの伝言を届けた相手だとわかると、ヒラルダはわずかに構えを解いた。

「はい、イーノックと申します。ヒダルゴ様には、前の戦時中に大変お世話になりました」「そんなこと、あったかしら？ 悪いけど、覚えてないわね。だから、貴方も気にしないでいいわ……それよりも、その名で呼ぶのは勘弁してもらえないかしら？」

深々と頭を下げてくる彼にも、ヒラルダはにべもない。今は先を急いでおり、イーノックに対して何の興味も湧かなかった。

「では、ヒラルダ様。これからトゥリース邸へ向かわれると聞きました。送らせては頂けませんか？」

「ごめんなさい、結構よ。馬車よりも、こちらの方が速いもの」

礼儀正しく申し出る老執事に、ヒラルダは左手を掲げる。その甲は、紫色に発光していた。

「さようでございますか。では、今一度当時の謝意を伝えさせてください」

「だから、覚えていないって言うてるでしょ」

ヒラルダは、わざと口調に不快さを滲ませる。慇懃な態度ながら、しつこく引き留める老執事に他意を感じた。

「私の今があるのは、ヒラルダ様のお陰にございます。主家と家族……そして片目を失い、失意のうちに自決しようとしていたところを、お救い頂きました」

最後の一言に、彼はわずかに目を見開く。

イーノックが示した左目が義眼であるとわかると、ヒラルダの脳裏にはヒダルゴとしての、遠い過去の情景が蘇ってくる。

黒煙の立ち上る焦土と化した大地にうずくまり、血の涙を流していた男……その手には、ガラス片が握られていた。胸に突き立てようとしたそれを取り上げて、彼の顔を殴ったのは自らの左手だ。

「……そうか、あれはこの地だったか」

灰色の記憶が、かつての声音に立ち戻らせる。

前の戦争から三十年近く経った今、戦禍の跡は見かけなくなった。あの惨劇を生き抜いた二人の再会は、ただの偶然だろうか……

「思い出して頂けまして、幸いにございます。感謝を告げることが斯様に遅くなりましたこと、お許しください」

「だから、忘れてたって言ったでしょ。お許しくださいいも何もないわよ。ご家族は……つて、ここにそっくりな執事さんがいるってことは、神の恩恵を受けられたようね」

再度深々と頭を下げるイーノックに対し、複雑な思いを抱きながらも、ヒラルダは口元に笑みを浮かべた。

「はい。ヒラルダ様がおっしゃる通り、茨の道の先には光がございました」

「そんなくっさい台詞、忘れなさい。せつかく助けた命、無駄にされてないってわかってよかったわ……もう行っていいかしら？」

当時のヒダルゴが発した陳腐な言葉を復唱され、笑みに苦さが混じる。この世界は、勸善懲惡という言葉が表すほど、単純にはできていない。その名を封印してから二十八年、どれだけそのことを思い知ったか。

「お引き留めして、申し訳ございません。なれど、最後に一つだけ、お聞きしてもよろしいでしょうか……此度の件に、貴方様が介入する真意は、前の戦争に関係するのでございましょうか？」

真摯な表情で問いかけてきたイーノックに、ヒラルダは眉をピクリと上げた。

「あの頃、貴方様はフカッシャー公爵ご夫妻と……」

「主の客人に對して、おしゃべりが過ぎるわよ。執事さん」

ヒラルダは、彼の言葉の続きを遮る。

老執事が敢て主従の一線を踏み越えてきたことが、わからなかったわけではなかった。老いてなお明晰な思考力で導き出した仮説が、ヒラルダにとっては不都合だった。挑むような視線を受け止めるヒラルダの漆黒の双眸は、一瞬だけ薄紫色に光る。

「失礼は承知の上、如何なる処罰でもお受け致します。ただ、主のため、お聞きしますのでございます」

イーノックは怯まなかった。

彼を突き動かしているのは、主フォーサイスに対する、揺るぎない忠誠心だ。

「当時、ほんの一時期ではございますが、あのお二方とヒラルダ様は、行動と志をともしにしていच्छやいましたね？」

ヒラルダが発する圧力をはね除け、彼は先ほど遮られた問いを舌に乗せる。

イーノックの義眼を見返すヒラルダの胸には苦々しい思いが渦巻くが、無様に表情を変えたりはしなかった。

「そんな昔のこと、もう忘れたわ……貴方も忘れなさい、執事さん。過去に囚われて、救える命なんてないわ。アタシは今この瞬間だけで手一杯なのよ」

ヒラルダは頭を振るだけで、肯定も否定もしなかった。

世の中には知らずに済めば幸いなことが、圧倒的に多い。手に余る情報は破滅を招くだけだ。

「……金言賜りました。恩を仇で返すような振る舞い、大変失礼致しました」

暫しの間、イーノックは自分を注視していたが、再び深々と頭を垂れた。

ヒラルダの意図を、彼は正しく理解したのだろうか？

「同じ悲劇を、二度は起こさせないわ……これでご満足？」

当時と違い、真っ白になった後頭部に向け、ヒラルダは駄目押しの一言をつけ加えて

やる。

「はい、十分で……」

顔を上げながらイーノックが発した声は、そこで途切れる。

つい先ほどまで彼の前にいた喪装の魔術師の姿は、白昼夢のように掻き消えていた。

「……ありがとうございます」

ヒラルダの名残を探すように、イーノックは誰に告げるともなく礼を言った。

今、ヒラルダと対峙するまでは、まったく確証がなかった。

戦火の下、一人生き残ったことに絶望し、自刃しようとした自分を思い留まらせた人物が、ヒラルダだったのか否か……生きる希望を失った自分を殴打し、熱い言葉で生きよと諭してくれた恩人は最後まで名乗らず、魔術師であること以外わからなかったのだ。彼の人が生き延びているという保証は何もなく、皮肉屋で掴みどころのない宮廷医ヒラルダとは、まるで別人だった。

だから、厚化粧を落とし、喪装を纏ったヒラルダが、恩人の面影を宿していたことに愕然とした。

戦前、宮廷付き魔術師を務めていたヒダルゴは、面白味に欠けると言われるほど生真面目で、実直な人物だったと聞く。自分を自殺寸前まで追い込んだ凄惨な戦争が、彼の

魔術師の人となりに影響を与えたと考えれば、変わり果てた今にも得心がいった。

非常時に行動をとにした人物にも、感化されたに違いない。

戦争終結後、ダグリード侯爵家の主達と家族に再会を果たしたイーノックは、謝意を告げるため、命の恩人の行方を捜し始めた。前の戦争での生存者を調べていくうちに、候補の一人としてヒラルダが浮かんだが、同一人物とは思えず除外していた。

生存者を調べる過程で、ヒダルゴが行動をとみにしていた人物がいた事実にも、辿り着いていたのに。

此度の一件で、当時は何も思わなかったその事実が、イーノックの脳裏を過ぎる。まさかと思いつながら、主との接見中に当時の調査資料を読み直し、符合したのはやはりフカッシャー公爵夫妻だった。

しかし戦後、両者の間には一切の接触がなかった。

かつて宮廷付き魔術師であり、現在は宮廷医を務めるヒラルダは文官に近い。退役軍人であるリユーノ・フカッシャーや、減多に出歩かぬオルガイム人の夫人との間に何らかの関係があるなどと、一体誰が思うだろうか。

フカッシャー公爵家が、陰謀の中核を担っていることは、もはや疑いようがない。

主から先日聞いたフカッシャー夫婦の企みを疑うつもりは毛頭ないが、戦後復興に尽

力した彼らを、凄惨な陰謀の渦中に見つけたくはなかった。

由緒正しい軍人家系であるフカッシャー公爵家は、ダグリード侯爵家とともに古くからアイリスの双壁と呼ばれていた。

かつて軍神と謳われた、剣の才を持つアスターと、機略縦横の知将として名を馳せたリユーノは、好敵手として武勲を二分していた。正反対の哲学を持つ二人は、衝突することが多かった。

それゆえに、周囲からは不仲だと思われていたが、実際は互いの手腕を評価しており、一目置いていたのだ。そんな二家の関係が、前の戦争を境に潰えてしまったことを、イーノックはずっと憂いていた。

だからこそ、ダグリード侯爵家当主フォーサイスと、フカッシャー公爵家令嬢ブルーデンスとの婚姻を、彼は手放しに喜んでいたのだ。すべてを知った今も、何かの間違ひではないかという思いを捨て切れなかった。

苛烈過ぎた戦争が明晰な將軍を、狂気の殺戮者に変えたというなら……それが、喪装の魔術師が彼らと袂を分かった理由だとすれば、こんな悲劇はない。

前の戦争の爪痕が、未来まで奪うようなことがあつてはならない。

「この道の先には、光があるのでしょいか……？」

虚空に投げた老執事の問いかけに、答える者は誰一人としていなかった。

4

亜熱帯気候のアイリスで、初夏の雨は涼気よりも不快感を増幅させるものでしかない。閉め切った室内は、じつとりと絡みつくような湿気を帯びていた。黒地に白薔薇を染め抜いた巾旗を掲げたトゥリース伯爵邸に、雨は一層の重苦しさを与えている。

窓には黒の遮光布をかけ、最低限に灯りが絞られた大広間に、常の煌びやかさはなかった。本来であれば、客人達に食事を振る舞ったり、酒を酌み交わしたりしながら談笑する場には、家主の悲哀が満ちている。

部屋中央の豪華な料理が並ぶはずの長机もどけられ、代わりに漆石の黒い棺が鎮座していた。石棺の中に横たわっているのは、この屋敷の当主であるメイスの愛娘、ゴージャダ。

黒いドレスを着せられた遺体のそこかしこに残る、惨劇の跡……屋敷を発つ前、怒りに赤く染まっていた頬は、見る影もなく蒼褪めている。胸の上で組まれた両手の指先も、

何かを掻きむしったのか、爪が割れていた。

その傍らに、メイスは跪いていた。

愛娘を喪った衝撃と哀しみは、彼の顔を一夜にして十歳は老け込ませた。威風堂々とした、アイリス近衛師団長の面影はどこにもない。落ち窪んだ目は血走り、頬がこけ、力なく項垂れる姿は敗戦の将さながらだった。

ゴーシャの突然死に対する疑問と驚愕は、今も彼の胸の中で肥大し続けている。

息子同然に愛した甥、フォーサイスから告げられた、娘の犯した悪魔の所業はとても信じられなかった。

ただし、彼の口述は心の奥底に、わずかに引つかかっていた事象とつながる。半信半疑で問い質したが、ゴーシャは否と答えた。目に涙を浮かべ、そんな恐ろしいことは、死んでもできないと……その言葉を、信じたかった。

けれど、純粹無垢な仮面は、トゥリス邸古参の侍女達の証言によって剥がれ落ちた。彼女達は、娘の所業をずっと見ていたのだ。

次々と辞職していったゴーシャ付きの侍女達は、トゥリス邸の厳しい行儀作法に耐えられなかったのだと思っていた。だが事実は違い、娘から手ひどい嫌がらせを受けていたのだ。身に覚えのない汚名を着せられ、屋敷を去った者もいるという。

そして、メイスに対する恩義の手前、抗えぬとわかっているフォーサイスに強いた、黙従の数々……そのいくつかには、メイスにも心当たりがあった。

彼が屋敷に来てひと月が過ぎた頃、ある事件が起こった。

生真面目な彼が訓練の時間を過ぎても現れず、敷地内のどこにもいなかった。時を同じくして、ゴーシャの姿も見えなくなっており、大慌てでそこら中を探し回った。

ようやく昼過ぎに、城下町を連れ立って歩く二人を見つけたメイスは、フォーサイス一人を頭ごなしに叱りつけてしまった。彼はただ蒼褪めていて、己の拳を受けても、決して言い訳しなかった。

町に連れて行かなければ、暴行されたと父に言いつける。

そのようにゴーシャから、脅迫を受けたらしい。手引きをした侍女の証言に、フォーサイスは当時と同じ表情を浮かべていた。

あのときの一件で、トゥリス邸ではゴーシャの言葉がすべてなのだと、幼い心に刻まれてしまったのだろう。以降、一層言葉数が減り、ゴーシャに向ける微笑みもひどく硬くなった。

常に緊張を纏い、自分を押し殺したような顔をするようになった彼を、亡父への想いや、生家を離れた心細さからだとずつと誤解していた。清廉な矜持を持つフォーサイスは、

逆らうことの許されない虜囚^{りようゆう}のような仕打ちに、一人歯を食い縛って耐えていたのだ。十余年耐え忍んでいたフォーサイスの背を押したのは、彼の婚約者、ブルーデンスの存在だった。ゴーシャは彼女にまで嫉妬の炎を燃やし、昏倒^{こんとう}するほどの重症を負わせてしまったのだ。

複合的事象によって起こった事故だと、何一つ悪びれる様子もなく己の正当性を主張する姿に、娘への信頼を完全に失った。

何よりも、実の母エリーシャへの、命の危険を顧みない発作誘導には心が凍った。

ゴーシャはエリーシャ付きの侍女に命じて、持病の喘息^{ぜんそく}の薬を隠したり、意図的に弱い発作を起こす薬とすり替えさせたりしていたらしい。信頼を置く侍女の裏切りに、妻は発狂するのではないか……そう心配したが、エリーシャは思いの外冷静だった。

規模の大きな王宮行事の度、それもフォーサイスが参加する場合に限って見舞われた発作の原因に、彼女も薄々は気付いていたようだ。

ただその事実を信じたくなかったために、今まで追及を避けていたのだろう。

エリーシャが発作を起こして倒れたときは、いつもメイスが傍らに付き添ってきた。そうして自分達の監視の目から逃れたゴーシャは、己に盲従する角狼隊隊長ユージン・リファイスを従え、好き放題振る舞っていたらしい。

フォーサイスはメイスの耳に入る前に、ことごとく握り潰してきたと告白した。彼ら自分に対する敬慕の念、メイスの妻への愛情までを、ゴーシャは利用してきたのだ。そのことに、自分達がどれほど傷付いたか……それでも、ゴーシャの遺体と対面したときの衝撃とは、比べようがなかった。如何なる邪悪な本性を隠し持ち、自分達を欺^{あざむ}ってきたとしても、実の娘の死を悼^{いた}まぬ親などいない。

今度こそ発作を起こしたエリーシャは、今も寝込んでいる。メイスとで一昼夜経った今も、ゴーシャの死を受け止められずにいた。

己が欲望のために数多くの者の人生を狂わせたゴーシャは、身勝手な罪深い人間だ。幾度反芻^{はさず}しても、擁護できるような理由は見出せなかった。

けれど、拭^{ぬぐ}い去ることのできない父としての想いが、叫ぶ。それは、死をもって贖^{あがな}わなければならないほどの罪なのか？

真に罰されるべきは、盲目的な愛情を注ぎ、正道に導けなかった自分だ。棺の中に横たわる蒼褪^{あおぞ}めた顔は、二度と目を開かない。

悔い改める機会は……それを見届ける己の望みは、永遠に奪われてしまった。

「……失礼致します」

控え目に扉を叩く音に続き、トゥリース邸執事の声がメイスの耳を衝く。緩慢な動作

で頭を上げると、彼が扉を開けて入室してきた。

「旦那様にお目通りを願いたいと、お客様がいらつしやっています」

メイスに向かつて一礼した後、執事は来客を告げた。

執事としては比較的若いものの、規律の厳しいトゥリース邸に勤めて十年の優秀な男だ。指示するまでもなく、昨日のうちに、王城ディオランサへの忌服届^{きふくしりけ}、ダグリード侯爵家を含む各方面へ此度の事態^{こたひ}を説明する書簡の手配を済ませていた。

今日から二十日間、弔問客を固辞する喪家のしきたりを、知らぬはずがない。近衛師団長という立場上、少なくともは招かざる客への対応も、彼は熟知しているはずだ。

「客……？」

悲しみで思考が鈍っているわけではなく、メイスには心当たりがなかった。

「忌服期間であることは告げたのですが、火急^{かきゅう}を要する用向きであると……宮廷医のヒラルダ、いえ、ヒダルゴ・ブrouル様が」

「ヒラルダだと……？」

メイスは、ますます訳がわからなくなる。

王城ディオランサの宮廷医、ヒダルゴ・ブrouル……通称ヒラルダは、国王からの信頼厚い医師であり、エリアスルート一とも謳^{うた}われる一級魔術師だ。彼が作製した医療物

資は近衛師団や騎士団に支給されていることもあり、各団員達の衛生管理責任者も務めている。

そのために月に何度か顔を合わせるが、親しく互いの屋敷を行き来するような間柄ではない。

メイスにとって、ヒラルダは苦手な部類の人間でもある。かつての彼は、寡黙^{かもく}な人物であつたのに、戦後、別人のように騒々^{そうそう}しく変貌してしまつたのだ。有能な男には変わらないが、平時でも極力接触を持ちたくないというのが、正直な気持ちだった。

「……丁重に、お引き取り頂け」

今は極彩色の魔術師と呼ばれる所以^{ゆえん}でもある、けばけばしい出で立ちを思い出すだけで虫唾^{むしず}が走る。

「ですが、ヒダルゴ様はどうしても旦那様にお伝えしたいことがあるとおっしゃっています……お嬢様にかかわることです」

わずかに戸惑った表情を浮かべた執事は、予想だにしないことを口にした。

「……な、に？」

メイスは、膝立ちだった身体を起こす。

一体、ヒラルダは娘の何を知っているというのか？

彼は逸る心のままに、執事の身体を押しつけて回廊に出た。来客の待合室も兼ねた、長い廊下の両端の白い漆喰壁の前には、鑑賞用の絵画や甲冑がズラリと並び、その合間に来客用の肘掛け椅子を備えている。

そのうちの一つに、目的の人物が腰かけていた。

「ヒラルダっ……？」

「……お久しぶりね、メイス」

驚愕に目を見開くメイスに、彼は優雅な動作で立ち上がる。

声音も口調もヒラルダ本人に間違いなかったが、いつもの彼とは姿がまったく違う。頭のとてんから足の先まで、色鮮やかな襷を剥ぎ合わせたような長衣は、漆黒の喪装に……逆立つ虹色の髪も、下ろして一つにまとめられ、瞳の色も黒く戻されていた。

これ以上はない作法通りの姿で現れたヒラルダに、メイスはたじろぐ。

「ゴーシャちゃんのこととは、ご愁傷様。執事さんから聞いたとは思うけど、アタシはそのことで貴方に話があるのよ」

口調だけは普段通りであることがチグハグで、彼の言葉の内容がなかなか頭に入ってこなかった。

「……、……入るといい」

メイスは動揺を抑え、何とかそれだけ絞り出した。

5

四日前、フカッシャー公爵家は正体不明の賊の襲撃を受けた。

被害に遭ったのは別館で、病氣療養中の長子ストレイスとその侍女、さらに居合わせた愛娘ゴーシャと、角狼隊隊長ユージンが死亡。ブルーデンス、フォーサイスも深手を負ったらしい。

フカッシャー公爵夫人からは、そのように聞いている。

ゴーシャの遺体を送り届けてくれた夫人自身も負傷したようで、右腕を肩から巻軸帯で吊るしていた。義息子を喪い、義娘も重傷を負ったティルディアは、ひどく憔悴していた。

説明の間にも涙で声を詰まらせ、濡れた薄紫色の双眸には義憤と悲嘆を湛えていた。演技とは到底思えない。自らと同様に我が子を喪った親の顔を、メイスは疑う気にならなかったのだ。

そして、正氣に戻ってからは、まずゴーシャの遺体を送り届けることを優先すべきだと考えたのだそうだ。ブルーデンスを連れ去ったフォーサイスに、動転からその行方を確認できていなかったとも言っていた。

現場の惨状から真っ先に疑われるのは、不法侵入を果たしたであろうユージンとゴーシャだろうに……ティルディアは死者を貶めることも、メイスを追及することもせずに帰っていった。

その清廉さが、メイスの心に罪悪感を植えつける。

負傷したブルーデンスを連れ、すぐに屋敷を離れたというフォーサイス……たとえ致命傷を与えられた後だったとしても、そこに残って延命処置をとっていれば、せめてゴーシャはトゥリス邸で死ぬことができたかもしれない。

戦場では見込みのある者を優先して助けよと教えたのは、自分。彼を恨むことが筋違いなのは重々承知している。

けれど、物言わぬ愛娘の遺骸を前にすると、そんな綺麗事は完全に吹き飛んでしまった。この先、知らされるゴーシャの死の真相に、ほんの少しでも居合わせたフォーサイスに落ち度があったなら……メイスには、己の感情を制御できる自信がなかった。

ゴーシャの棺の前に跪くヒラルダの背を見つめるメイスの胸中には、様々な懸念が渦巻いていた。

娘の死を悼み、黙祷を捧げる喪装の魔術師に、常のふざけ切った面影はない。疎遠だったヒラルダがわざわざ屋敷にやって来た意図も、ここまで早くゴーシャの死を知り得た理由も、皆目見当がつかなかった。何しろ彼は、娘とろくに面識がないのだ。

そんなヒラルダが、一体ゴーシャの何を知っているというのだろうか？

「……三人目……いえ、四人目かしら」

「ヒラルダ？」

メイスは、彼が不意に呟いた言葉に眉を顰める。

「いいえ、なんでもないわ。メイス」

頭を振って立ち上がったヒラルダは、メイスの方へ振り返った。

彼の素顔を見るのは、およそ二十八年振りだ。老いの遅い魔術師である上、姿留めの魔法を使っているために、戦前から何一つ変わっていないかった。メイスよりも年嵩であるはずなのに、青年期を出ているようには見えない。

ただし、その整った容姿には、言い知れぬ威圧感があった。常の化粧は、鋭い印象を曖昧にするためだったのかもしれない。

「ゴーシャちゃんの遺体を運んできたのは、ティルディアだそうね。彼女からは、フカッシャー邸で何があったか聞いたかしら？」

「ああ、フカッシャー邸の別館が賊に襲われ……」

「いいわ、説明してくれと言ってるんじゃないから。今の貴方が口にするのは、酷こでしょう」

説明しようとしたメイスに、ヒラルダは首を横に振る。

自分の心中を察した言葉に、彼に抱いていた先人観がわずかに薄らいだ。戦後、馬鹿馬鹿しい扮装おんそうをし始めてから、まともに会話をしたことがなかったが、彼の本質は常識的なままのようだ。

「彼女の言ったことは、一旦忘れて。それが必ずしも真実とは限らないから」

確信を持つているような強い語調に、メイスは混乱した。

ヒラルダが何を知っているにしろ、子供を喪うしなった親の顔を当事者の自分が見違えるはずがないのだ。

「突然現れたアタシの言葉では信用し難いでしょう。だから、今からゴーシャちゃんの記憶を見せてあげる。亡くなってまだ四日なら、遺体から残留思念を取り出せるわ」

有能な宮廷医にして、エリアスルート随一と呼び声も高い魔術師の言葉に、メイスの

息が詰まる。

「何があったか自分の目で見れば、貴方も受け止められるでしょう？ 遺体を傷付けたりはしないから、安心して」

それは真相を知りたかったメイスにとって、願ってもない申し出だった。

心の底から期待が湧き起こるが、それと同時に猜疑心さいぎしんも迫り出してくる。突如現れた彼は、得体が知れな過ぎるのだ。

それに、どうしても気懸きかりなことがあった。

「……ヒラルダ、娘の死をどこで知った？」

城に届け出を出してから、いまだ一兩日しか経たっていない。直接係わり合いのない彼の耳に入るには、あまりにも早過ぎた。加えて、ティルディアがゴーシャの遺体を送り届けてくれたことは、トゥリス伯爵家の人間以外知らないはずだ。

ヒラルダが知るといふ娘の情報は、喉から手が出るほど欲しい。

しかしながら、今の今まで疎遠だった彼を、安易に信用することができない。完璧な喪装で親切ごかしに近づいてきたヒラルダこそが、襲撃の張本人ではなからうか……？ そんな疑いが消えなかった。

「甥っ子が甥っ子なら、叔父も叔父ね。血の気が多いったら、もおー……こんなことが

あつた直後だから難しいだろうけど、もうちょっとだけ冷静になってちょうだい」
 メイスの視線に宿る疑念を嗅ぎつけたらしい彼は、どこか憐れむような表情を浮かべて言った。

「こんなコト言いたかないけど、何の接点もないゴーシヤちゃんを殺す動機なんて、アタシにはないわよ？ 地位も名誉も、もう要らないわ。王都から離れたアブルサム館にいた彼女を、わざわざ連れ戻して殺すのも馬鹿げてる。ダグリードやフカッシヤを巻き込む意味もないし、疑われる危険を冒して貴方の前に現れもしないわ」
 すぐに理路整然とした言葉も続き、メイスは沈黙するより他なかった。

次いで、この無念さをぶつけられれば、ヒラルダでも誰でもよかったという己の身勝手な思いに気付く。自分の心は、随分と追い詰められていたようだ。

「……だが、なぜだ？」

殺す動機がないことはわかってても、死を知り得た答えにはなっていない。

依然として、彼の目的は不明だった。

「事情は当事者であるフォーサイスから聞いたわ。貴方の甥っ子は、重傷の婚約者の治療をアタシに頼んだのよ」

予想外な言葉に、メイスは瞠目する。自分以上に極彩色の魔術師を毛嫌いしていた

フォーサイスが、ヒラルダを頼るとは思ってもみなかった。

彼の行動は正しい。私怨を捨て、人命救助を優先したのだから。

けれど、メイスの心は複雑だった。

「二人は無事なのか？」

「回復までまだしばらくかかりそうだけど、無事よ。ゴーシヤちゃんの最期の記憶を見れば、アタシの治療にも役立つの。アタシは医師として、貴方は遺族として真相を知りたい……利害は一致しているはずよ」

まっすぐに自分を見つめるヒラルダの言葉には、一理あった。

メイスは、彼の背後の石棺に視線を走らせる。真実を伝える術を失った娘の死に顔は、その無念さを訴えているかのようだ。

「……どうすればいい？」

メイスはようやく、彼にそう問いかけた。

随分と前から、選ぶべき道は決まっていたのだ。それをずるずると引き延ばしていたのは、死してなお娘の本当の姿と向き合うことを恐れていたからだ。父親として、このまま立ち止まっているわけにはいかない。

「ありがとう、メイス。ゴーシヤちゃんの遺体には、絶対に傷を付けないことを約束す